

1歳児の泣きに困難感を示す母親の感情・情動とその関連要因

著者	田淵 紀子, 島岡 啓子, 亀田 幸枝, 関塚 真美, 坂井 明美
雑誌名	日本助産学会誌 = Journal of Japan Academy of Midwifery
巻	17
号	3
ページ	114-115
発行年	2004-01-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/34924

doi: 10.3418/jjam.17.3_108

23 1歳児の泣きに困難感を示す母親の感情・情動とその関連要因

金沢大学医学部保健学科

○田 淵 紀 子 島 岡 啓 子 亀 田 幸 枝
関 塚 真 美 坂 井 明 美

I 緒言

これまでに、生後1ヵ月、4～5ヵ月と継続的に児の泣きに対する母親の困難感の実態と困難を感じている母親がどのような感情・情動反応を示しているのかを明らかにしてきた。今回は1歳時の児の泣きに対し、困難感を抱いている母親の感情・情動反応の実態と情動に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

II 方法

1. 調査対象および方法：A, B 県内の病産院にて出産した母で、1ヵ月および4～5ヵ月時調査に回答して1歳時調査にも承諾を得た305名である。児の誕生頃に調査の依頼書と無記名の自記式質問紙を郵送し、調査の同意と郵送による返信の同意を得た。回答紙は研究者のもとで記号処理し調査結果は個人が特定されないよう厳重に管理した。

2. 調査内容：基本的属性に加えて、泣きへの困難感を表す項目として「子どもが泣いて戸惑うことがある」、「抱っこしたりあやしても、なかなか泣きやまないことがある」、「泣いた時、自分なりの泣きやませ方がない」、「夜泣き時の対応に困難を感じたことがある」の4項目。児が泣いた時の感情・情動反応として受容的な情動（かわいい、うれしい等）10項目、非受容的な情動（イライラする、辛くて泣きたい等）10項目。その他、子どもの泣きの状態、母親の生活状況、子どもができてからの生活の変化に対する思い、育児の見通し、育児の充実感、育児負担感、育児の自信感等。

3. 分析方法：泣きへの困難感を表す項目の得点を、よくある（4点）、少しある（3点）、あまりない（2点）、全くない（1点）とし、4項目の合計得点を困難感得点（range4～16）とし、得点が高いほど困難を感じている母親ととらえた。困難感得点の平均±1SDを基準に、困難を感じている母親群（以下、困難群）、平均群、困難なし群に分け、一元配置分散分析、FisherのPLSDにより困難群と他の群で児が泣いた時の感情・情動反応を比較した。感情・情動反応は、“ほとんど思わない（1点）”から“思う（4点）”までの4段階リッカート尺度とし、非受容的な情動項目は逆転処理し、受容的な情動と非受容的な情動を合わせた20項目の合計得点を情動得点（range 20～80点）とし、得点が高いほど受容的な情動を示すととらえた。また、困難群の母親の感情・情動に関連する要因をPearson's 相関係数（Fisher's 検定）か

ら求め、その影響力をみるために、有意な相関を認めた関連要因を独立変数に、情動得点を従属変数として重回帰分析(ステップワイズ法)を行なった。統計解析はStatView. Ver. 4. 02Jを用いた。

III 結果

1. 対象の概要: 調査用紙は305部配布し、251名から回収(回収率82.3%)した。初産婦123名(49.0%)、経産婦128名(51.0%)であった。困難感得点の平均は 8.0 ± 1.8 点であり、困難群51名、困難なし群54名、平均群146名であった。

2. 困難群別の感情・情動得点: 困難群の母親の情動得点は 53.7 ± 7.6 点で、困難なし群の 64.4 ± 9.5 点、平均群の 59.3 ± 8.9 点に比べ有意に低かった($p < .0001$)。情動項目毎の得点を比較した結果、“あせる”、“イライラする”などすべての非受容的な情動項目において、困難群と困難なし群で有意な差が認められた($p < .001 \sim .0001$)。

3. 困難群の母親の情動に関連する要因と影響力: 困難群の母親の情動には「育児充実感」($r = .501$)、「育児の見通し」($r = .368$)、「育児負担感」($r = -.478$)、「生活の変化」($r = -.573$)などの要因が有意に関連していた($p < .01 \sim .0001$)。とくに「育児充実感」($\beta = .329$)と「生活の変化」($\beta = -.430$)の2要因で全体の40.7%が説明された($R = .638$, $R^2 = .407$, $p < .0001$)。

IV 考察

困難群の母親は、非受容的な情動傾向を示しており、育児の充実感や見通しを持ちにくいこと、また、育児に負担を感じ、生活の変化として、自分の時間がなくなったことに負担を感じる、想像していた育児と今の生活にギャップを感じるなどの情動に関連することが示唆された。4-5ヵ月時¹⁾と比べると、泣きに困難感を示す母親の非受容的な情動傾向とそれに関連する要因については、今回も同様の傾向であった。しかし、児の「泣きの性質」や児の「寝入りの状況」は、今回の調査で関連要因にあがってこなかった。これは、4-5ヵ月時に比べて児の気質や寝入りの状況に変化が生じたか、経験の上積みから泣きへの対処が可能になったかは断定できないが、1歳では泣き以外の方法でも母子間のコミュニケーションがはかれる可能性もあり、泣きへの困難さが減少したと推察される。1歳児の泣きに対する母親の困難感は、児側の要因より、母親自身の時間確保という母親の心的エネルギーの程度に依存しているようにも考えられる。さらに母親の非受容的な情動と、育児充実感および育児の見通しは連動する傾向を示しており、児の泣きに対する母親の困難感は、育児エネルギーを阻害する重要なサインの一つとして注目に値すると考える。

V 結論

1歳児の泣きに困難感を示す母親は、非受容的な情動傾向を示し、この情動に関連する要因として、「育児充実感」、「育児の見通し」、「育児負担感」、「生活の変化」が挙がり、その中でも「育児充実感」と「生活の変化」が最も影響していた。

VI 文献

- 1) 田淵紀子他、4ヶ月児の泣きに困難感を示す母親の感情・情動とその関連要因、日本助産学会誌、15(3)、204-205、2002。